

中島らも

らも吐

ぼなし

②



Yamada
Fujii

中島らも



中島らも
吐
②

らも咄②

平成五年五月五日 初版発行

著 者 中島らも

発行者 角川春樹

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 株式会社宮田製本所

発行所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二二三



電話 営業部〇三・三六二・八五三

編集部〇三・三六二・八四五

振替口座 東京三一九三〇八 千一〇三

定価はカバーに明記してあります。

落丁・乱丁本は小杜角川ブック・サービス宛にお送りください。送料は小杜負担でお取り替えいたします。

©Printed in Japan

ISBN4-04-872742-7 C0093

らも咄②

目次

第一話	宿がえ奇談	五
第二話	鶏ぶるまい	一九
第三話	手造り、罪造り	三
第四話	たたみ往生	四七
第五話	大人物	六
第六話	ふぐの通夜明け	七五
第七話	牛乳時代	九
第八話	水に似た酒	一〇五
第九話	噂のサイコセラピー	一二七

第十話 鉄工バンドが行く — 三

第十一話 スウィートホーム — 一五

第十二話 うし相撲 — 一五

第十三話 たばこぎり — 一五

第十四話 弁護士物語 — 一六

第十五話 耳かき始末 — 二〇

第十六話 太平養生高血压 — 二三

第十七話 つちのこ — 三七

装丁 山藤章二

第一話
宿がえ奇談



えー、本日は「引越」に関するお噂うわさでございまして。ほんの十年ほど前までは、引越しというたいへんな騒ぎでした。一人ではどうにもならんから、友だちに声をかけて集まってもらいまして、ああやこうや言いながら荷物を運びます。友だちが一人もおらん奴はどうするかといいますと、しょうないから最初にはいった四畳半のアパートにずっと住んでるという……。

これが会社の上役が引越しやということになるともつとたいへんです。下のものは全員、休日返上で手伝いに行かんらん。

「ん？ 山崎やまざきくんは今日来てくれてないんか。そうかあ。彼も今のうちに引越しに慣れといたほうがええんやが。ワツカナイの営業所にポストがひとつ余つとったからなあ」
いきなり人事異動が決まってしまうようです。

その点、最近の引越しというのは、業者さんが乱立してきますからラクです。引越し業者も過当競争になってますから、サービス合戦になってます。引越しの日に、ダンナ

さんが朝、奥さん一人残して会社へ行く。帰るときには新しい家へ。こういうのはもう常識になってしまいました。トラックで移動中に殺虫剤で燻蒸のサーブिसしてくれるところとかね。大阪には一軒、なんと「夜逃げ専門」の引越屋さんというのがあります。サラ金に追つかけられてる人とか、男と別れたい女の人なんか利用するんですが、この手際がすごい。一人を見張りに立てときまして、あとは力の強い奴が四、五人で、あつという間に荷物を運んでしまうそうです。我々、ふつう「夜逃げするような人が引越し代ちやんと払うんやろか」と思うてしまいますが、これは百パーセント、返ってくるそうです。ま、考えてみればそうでしょう。引越し代踏み倒して夜逃げせんといかん、というときに、今度は誰にたのんだらええねん、てなことになりますから。

さて今回登場しますのは、別に夜逃げするわけやない、六畳一間のアパートに住んでおりましたこの男、いたって気楽なやめ暮らし。物も増えて部屋が手狭になってきたんで、近所に一DKのアパートを見つけました。今日がその引越しの日。

(電話の音。ジリリーン)

男 はい、中島。おお、石やんかいな、ひさしぶりやないか。どないしてんねんな。……え？ ああ、そうなんや。今から引越しするところなんや。天王寺にええアパートみつくてな。DKっちゅうんか？ 台所一部屋ついてるねんけど、今と家賃、一万円しか違わへ

んのや。え？ 手伝い？ いらんいらん、そんなもん。水くさい？ 何言うてるんや、石やん。あんたみたいな忙しい人に、引越しの手伝いなんかたのめるかいな。石やん、たださい足腰弱いねんから。次の日から寝込まれたらかなわんがな。ほんまに、氣いつかわんといて。うん、手伝い？ プロの業者にたのんだがな。えっ？ 石やん、あんた、引越したことはないんかいな。ちよつと電話帳見てみいな。引越センターだらけやで。世の中、引越しの取り合いになつとるんや。一番安そうなとこに決めたつたんや。

お。下でクラクション鳴ってるわ。トラック来たみたいや。そしたら、新しい所、ちよつとおちついたら電話するわ。一本ぶら下げて遊びに来て。うん。ほんじゃ、また。おおきに。(ガチャン)

(チャイム、ピンポーン)

おつ、来た来た。はあい。(ドア、あける)

老人 おやすみのところ、恐縮至極でございます。

男 はあ。

老人 わたくし、久島^{くしまいちく}一九郎^{いちろう}と申す者でございます。

男 はい。……えらいヨボヨボの爺^{じい}さんやな。……あの、どういったご用件で。

老人 はい？ なんですございますか？

男 いえ、あの。どういうご用件で。

老人 ああ。はいはい。生まれは大正八年でございます。

男 ええ。

老人 蛇足ではありましようが、生まれはハルピン。

男 ハルピンですか。

老人 そうでございます。

男 で、ご用件はどういう。

老人 ありがとうございます。いえ、お腹なかはすいておりません。

男 いや、そうじゃなくてですね。何の用事でいらつしやったんですか。

老人 え。それでしたらこういうことでございます。(帳面を出してツバをつけてくりながら) ああ、これだ。平成三年七月二十日午後四時。こちら様より「転宅の意あり」とのお知らせを受けてまして、本日はその一助となるべく、こうして参上いたしましたのでして。

男 え？ すると、引越しの手伝いに。

老人 さようでございます。

男 おかしいなあ。私が電話したところは、「グイック」っていう引越センターで。
老人 それでしたらまちがいございません。私、姓名を久島一九郎。これをば略して「グイック」としたわけでございまして。そのほかに、私、俳諧はいかいを趣味としておりますので、引越しのお手伝いのたびに、つたないながら句を一句、よませていただいて、ご転居の

お祝いとしておる。この「句一句」もまた会社名の由来でございます。今回でしたら、『住みなれし家を出ていく夏陽なつひかな』てなことでしようか。

男 はあ。ということは、社長さんでいらつしやいますか。

老人 とてもものに、人さまの上に立つ器ではございません。が、僭越せんえつではございますけれども、「有限会社クイック・代表取締役社長」と、ま、こういうことに。くけつくけつくけつくけつ。

男 ……あの、どこかお悪いのですか？

老人 いえ、今のは、笑ったのでございます。

男 ああ。そうなんですか。（小声で）……ノドでも詰まつたんかと思たがな。……いやあ、でも、社長みずからあいさつに来ていただけるとは、感激ですわ。

老人 人間はみな一期一会いちごいちえ。こうして引越しのお手伝いをさせていただくのも、ありがたいご縁でございましょう。

男 はあ。で、他のスタッフの人は。

老人 ……。え？

男 ほかのスタッフの方は。

老人 ……。え？

男 え、ですから、荷物を運んだり、運搬してくれる人はどこにいらつしやるんですか。

老人 (きよとんとして) ……ん? と、申しますと。……はいはい。私以外の人間と申しますと、専務のことでございますな。ご安心ください。おっつけ、上がってまいりましょうほどに。

男 専務?

老婆 ああ、お父さん。ここでしたんかいな。わたし、また、一階やとばかり思てたもんやから、あっちこっちノックして、若い人に怒られてしもうたんやわ。

老人 二階やと何回も言うたであらう。何を聞いておったのだ、このもうろく婆あ。

老婆 いやっ。なんにも人様の前でそないな言わはり方せいでもええやないですか。情の無い……(泣き出す)

老人 ええい、また泣くかつ。なぜにお前はそうに女々しいのか。

老婆 そやかて、女やもん。

老人 いいかげんに干上がったらどうかっ。

老婆 きやつ、ひどいわ。

男 あの……

老人 あ、申し遅れました。専務、と言いましても私の家内ですが、「久島とめ」でございます。本日は、この二人、誠心誠意、お客さまの引越しのお手伝いをさせていただきます。

男 と、いいますと。あなたがたお二人で荷物を……。

老人 はい。実は、私の叔父^{おじ}にあたります常務も参加するはずだったのですが、あいにく四日前に倒れまして。これがどうも肝不全ということでここ二、三日がヤマ場だと……。何でしたら今から病院に電話しまして。

男 いえ、けっこうです。そういう状態の人に來てもらわんでも。

老人 そうですか？ けっこう使命感の強い男なんです。もと憲兵でしてね。

男 はあ。

老人 では、さっそくですが、荷物の方を見せていただきましょうか。

男 あ、どうぞ。こっちです。

老人 ふむ。

男 一応、全部段ボールに詰めて梱包^{こんぽう}してあるんですが。

老人 (鋭い目で見て) ……ふむ。

男 あの……どんなものでしょうか。

老人 ふむ。この中で、ことに貴重品であるとか、ことに重いもの。天地無用に注意せねばならないものとかは、どれとどれですかな。

男 えー、それは、あの端のと、あのタテ長のと。

老人 そういうものには、はつきりとわかる目印をつけておいていただきたい。たとえば

まっ赤なガムテープで×印をつけるとかですな。

男 あ。これは失礼しました。今からすぐにやります。ガムテープで、こう、こんな感じですか。

老人 そうです、そうです。

男 なるほどなあ。いや、実は私、あなた方があんまりご高齢なんで、一瞬、〃大丈夫かな〃と不安になつとつたんですわ。それがいまの一言で納得いきました。やつぱり亀の甲より年の功て言いますけど、プロですわなあ。やたら力まかせにポイポイ運ぶ若い人とはノウハウが違うわ。失礼ですが、大正生まれという、いま、七十？

老人 七十二歳！ 妻〃とめ〃七十三歳！

男 この〃引越〃を商売になさつて五十年くらいですか。

老人 いえ。北浜の製薬会社を五十五歳で退職いたしましたして、その後、ビルの管理を十年。五年ほどぶらぶらいたしましたが、人間やはり働くことが長生きの秘訣と得心いたしました。いまのこの商売を始めたのが二年前かと。……なあ、お前。

老婆 ええ、あなた。

男 え？ まだ二年なんですか。

老人 その間、私のカリエスやら妻の子宮脱やらで休業が一年半ほどございましたから、まだまだほんの駆け出しのようなもので。なあ、お前。

老婆 ええ、あなた。

男 それにしては、荷物をキツとにらんで貴重品とか重い物には印をつけろとか。いかにもプロらしいやないですか。

老人 いや、それは。つまるところ、我々の苦い経験から出てきましたもので。

男 と、いいますと。

老人 今年の初めのことでしたか。大きなお屋敷の引越しを手伝いまして。そのときに、李朝の青磁のはいった木箱を、あまり重かったもので取り落としてしまいました。一千二百万はするという壺が粉々。はっははは。

老婆 前の晩、お酒をあんなに召し上がったからなんやわ。

老人 黙れ。お前がわしの爪をあまり深爪に切ったから、指に力がいらないんだのだ。

老婆 また、いつでもそうして人のせいにする。

男 で、そんな高いもの壊して、弁償はどうなったんですか。

老人 うん。半分は相手のかけてた保険で出たのだが、あとは我々が返さんといかん。今の調子でいくと、借金返すためには二百歳くらいまでは生きないかんあ。

老婆 ほんとにねえ。

老人 こりや、泉重千代さんを抜くな。くけつくくけつく！

老婆 だからねえ、二人で決めたんですよねえ。